

歯学と医学の懸け橋



東京歯科大学千葉病院で、味覚異常外来、口腔乾燥症外来、金属アレルギー外来を担当し、すでに5年の月日が流れた。その原因の多くが、全身疾患の治療薬の副作用、栄養のバランスの崩れ、免疫系の問題など歯科口腔の知識のみでは対応できない場合が少なくないことが改めて認識できるようになった。また、特殊外来以外に担当しているインプラントのセカンドオピニオン外来でも、病気を抱えている患者の「インプラントを入れて大丈夫か?」という質問に、歯学的のみならず医学的知識をもって答える必要があることを痛感した。

現在、超高齢化が進む日本において、糖尿病や骨粗鬆症といった基礎疾患をもつ患者が増加し、歯肉や骨の創傷の治癒に及ぼす影響は計り知れない。それを知らずに治療を行い、治りが悪いと行って、なぜだろうと言っていた時代は終わったのである。

翻って今までの歯科医療を考えると、歯の欠損をいかにして修復するか、歯周病をいかにして治すかに主眼が置かれ、口腔粘膜などに発生する病変について、治療に費やす時間はあまりなかったといっても過言ではないであろう。口腔内に発生する症状の多くが全身の病態と関連していることは知っていても、なかなかその疾患に関連する隣接医学的知識や臨床検査値を学ぶ機会も少なかったと思われる。

歯科医師が歯と歯周組織の専門家であることは疑いのない事実であるが、これからは口腔医として患者の治療に当たる必要がある。本書は、医学部病理専門医と歯学部口腔病理専門医がお互いの領域を超えて一元論で作られたものである。先生方の口腔医への階段を上る杖になれば幸甚に思う。

2011年1月

井上 孝